

国語科

「言葉の力」を実感し合う学習指導

—古典文学の学習を通して、「生きる力」を育む学び合い—

提案者 石井 健介 川嶋 正志 菅 俊輔 松原 洋子

キーワード 「言葉の力」 「生きる力」 学び合い

1. 国語科の「深い学び」

国語科における「深い学び」とは、

- ① 様々な単元や教材の学習を通して言語表現に関わる知識や技能、思考力・判断力・表現力等を習得する。
- ② ①で習得した知識や技能、思考力・判断力・表現力等を新たな単元・教材学習においても活用する。
- ③ それぞれの作品や表現自体を味わい、読み進めながら、その作品・表現が成された背景や作者・著者の他の作品等、そこから派生する様々な関連作品・表現にも多面的、多角的に触れる。
- ④ 単元・教材学習の一連の過程を楽しみながら、意欲的に、「言葉の力」を実感する。
- ⑤ ①～④の過程を経て理解や思考力・判断力・表現力等をさらに深化させていく。

という、往還あるいは循環の形態をもった、教科の言語活動の充実という本質に迫る学びであると考えられる。そして、本校国語科は、本校紀要52号に、以下のように記している。

国語科における生徒の「意欲の高まり」とは、ある単元・ある教材に対して、それまでの事前の学習を経た上で、「もっとこの教材（に関するもの）を読み深めたい」「もっとこの教材について話したい・聞きたい」「もっとこの教材に関して表現したい（書きたい）」「もっとこの教材について知りたい、深めたい」等、「言葉による様々な表現」を用いた学習の中で、生徒一人ひとりが新たな学び、気づきを主体的に求めていく姿勢と取り組みの深化・向上、であると考えられる。

（東京学芸大学附属小金井中学校研究紀要52号）

国語科における継続的、広汎的な「深い学び」の実践を図るためには、上記のような、生徒自身の国語科の学習や単元・教材に対する様々な「意欲の高まり」の、継続的な持続が不可欠である。その「意欲の高まり」が様々な学習過程での活動の土台となることによって、個々の生徒一人ひとりとして、あるいは学習集団として、新たな知識や理解の獲得を進め、一単元や一教材を超えた、多くの単元・教材学習の絶え間ない継続や往還の中で、「深い学び」をより充実させ、その学びを次の実践に活かしていくことが求められている。そのためには、適宜「意欲の高まり」そして「深い学び」の実践に繋がる教材を投入すること、そして授業者対学習集団（全体、班、ペア、個人）をはじめとする、他との関係があって成立する「学び合い」の場を効果的に設定し、他との交わりの中で気づく新たな視点や知識・理解の往還を実感させながら、授業を進行していくことが重要である。

2. 「国語科の協議主題」設定の理由

昨年度までの実践をふまえ、「言葉の力」を実感し合うこと、そして「生きる力を育む学び合い」という大きな柱はそのまま踏襲し、本年度より改めて、「生きる力を育む」単元・教材として古典文学における表現に焦点を絞り、古典文学の学習を通して「生きる力を育む」授業の実践を企図し、取り組みを進めることとした。

「生きる力」とは、単に衣食住を全うするための経済的な力、あるいは心身の壮健を維持し、病等を克服し、命を永らえる力のみを指すものではない。命に直接的に関わる問題だけでなく、自分がどのよ

うに生きていくかをしっかりと見つめることができる力もその過程には含まれている。実はこのことは昨年度までの実践でも意識されていて、教材文での学びや気づきを発展させて、単なる肉体の消滅の有無をともなった「生死」という概念だけではなく、自分のこれまでの生活やこれからの人生につなげて考えるという、自らの「命（＝生き方、人生）を見つめる姿勢」に繋げ、様々な価値観を持って「生きる力」「生きていこうとする姿勢」を醸成していくことに結びつけられた。

そこで本年度は、昨年度までの「生死」に直結することの多い「病（やまい）・「戦（いくさ）・「災（わざわい）」という学習の柱を超え、これまでの様々な人々や時代状況によって残された言語表現の積み重ねの中から、様々な人々の人生観や生き様、それらが形成されるに至った時代背景等に触れ、日本人の様々な価値観の醸成や変遷を実感するといった過程を経て、学習の広がり、理解の深まりを持たせたいと考えた。そこで、教科としての主題を、「言葉の力」を実感し合う学習指導～古典文学の学習を通して、生きる力を育む学び合い～」とした。本年度はその一端として、古典文学の学習の中で、「自然」との向き合いを柱として、その「自然」との向き合いの中から、改めて自らの生活や人生に活かせる「生きる力」にあたる表現や文脈を見出し、価値付けていくことを目指して、実践を行うこととした。授業の中で、生徒一人ひとりがひとつひとつの言葉について、辞書的な意味にとどまらず、脈々と受け継がれてきている「言葉の力」に気づきながら価値付けを行うことができる場を設定していく。

3. 国語科において、「深い学び」を創造するためのしかけ・場の設定

本校国語科では、昨年度まで「言葉の力」の実感を通じた「命をみつめ生きる力を育む」国語科の授業の実践を目指し、「言葉の力」を実感し合う学習指導～命をみつめ、生きる力を育む学習指導～」を教科主題に設定していた。その上で、「病氣（病～やまい～）」「戦争（戦～いくさ～）」「災害（災～わざわい～）」を各学年の単元・教材を貫くテーマとし、既存の単元・教材を活かしつつ、新たな単元・教材開発ならびに授業実践を図った。一昨年度は現代文の作品・表現、昨年度は古典の作品・表現を、それぞれ単元・教材の核とし、様々な言語表現を用いて、授業実践した。

本年度より新たに「言葉の力」を実感し合う学習指導～古典文学の学習を通して、生きる力を育む学び合い～」を教科主題とした。生徒の「意欲の高まり」を土台とした「深い学び」の実践を追究しつつ、生徒一人ひとりや集団としての多様な価値観を形成しながら、「言葉の力」を実感させたい。そして、様々な形態での学び合いを通して、「自然と向き合う」ことの核に「言葉」「言語表現」を据えるからこそ、学び、気づき、育むことのできる「生きる力」を、それぞれの生徒が見出していくことで、「深い学び」に繋がっていく授業実践を図っていききたい。

3.3 単元名「いにしへの心と言葉を見つめる」 第3教材「おくのほそ道」（中学3年）

3.3.1 単元の目標

- ①音読や暗唱をとおして、日本語のリズムのよさを実感する。
- ②俳句・漢詩・俳諧紀行文のそれぞれを読み、先人の視点や表現方法を学ぶことで、自分の生き方や表現法がどうあるべきか思考する。

3.3.2 単元の構成（全14時間扱い）

- | | | |
|------|------------------|-------|
| 第1教材 | 近代の俳句（俳句の歴史も含める） | （4時間） |
| 第2教材 | 漢詩 | （4時間） |
| 第3教材 | おくのほそ道（松尾芭蕉 作） | （6時間） |

3.3.3 単元設定の理由（省略）

3.3.4 第3単元『おくのほそ道』の学習指導計画（6時間扱い）

- 第1次 『おくのほそ道』の概要を知る。（文学的知識）（0.5時間）
- 第2次 『おくのほそ道』の冒頭・平泉・立石寺の部分から、作者の見た情景や心情を読み取る。

（5時間）

第1時「冒頭」を読み、芭蕉が旅に出る動機と決意を推測したり当時の旅の様子を想像したりする。

第2時「つぼのいしぶみ」を読みながら、不易流行の考え方や芭蕉と平家物語との関連を知る。

第3時「平泉」（前半）を読み、悠久の自然（変化しないもの）とそこに展開された人間の歴史（変化したもの）の対比に気づく。（本時）

第4時「平泉」（後半）を読み、変化するべきものの中に変化しないものがあったことに気づいたうえで、松尾芭蕉による「不易流行」の考え方についていろいろな考えをめぐらす。

第5時「立石寺」を読み、芭蕉が幾度も俳句を推敲したことを知ったうえで、芭蕉の思いが深まっていく様子をさぐる。

第3次 『おくのほそ道』全体を振り返り、作者の生き方・考え方に対する感想や、俳文・俳句の表現に対する感想をまとめ、発表しあう。（0.5時間）

3. 3. 5 『おくのほそ道』の目標

①『おくのほそ道』の本文を音読し、リズムカルな文体を体験することにより、古文を読む楽しさを味わう。

②俳文や俳句に描かれた人間の描写、情景描写を通して作者の心情を読み取り、作者の思考について自分なりの考えを持つとともに、自分の生活との対応を意識する。

3. 3. 6 研究主題にかかわる部分を中心にした、指導の流れ（単元学習の実際）

『おくのほそ道』平泉の部分は、前半と後半とに分けられる。前半では昔の繁栄がうそのように、何もなくなってしまった平泉の様子を、後半では長い時間を経たにもかかわらず、人間の手によって燦然と光り輝く状態を保ち続けた様子を語る。まさにこれは不易流行である。学習者に芭蕉のたどった考えを追体験させるとともに、彼らの実生活の中にある不易流行を考えさせるうえで、とても重要な場面といえよう。そのためにも、いかに学習者が松尾芭蕉の想いに寄り添えるかが大切な指導となってくる。今回、教師が仕掛けたのは以下の点である。

①「学ぶ意欲」を持てるような「学び合い」を仕組んでいる。

- ・個々に考える時間を保証する。
- ・近くの仲間とともに話し合うバズ・セッション。（ひんぱんに「話し合い」をさせる。）
- ・ネームプレートを黒板に貼ることで、自分の立場を意思表示したり仲間の考えを知ったりする。
- ・通称「さりはか一ど」（座席表型の自己評価。授業後、その日のうちに、学習者全員の思考の到達点が全員に示される。）の継続的实施

②わかったつもりになっている学習者に対し、既習事項を投入し、つなげて考えさせることにより、現在の教材の読解をより深める。

松尾芭蕉は何もなくなった平泉を描写した後、杜甫の漢詩『春望』の一節「国破れて山河あり、城春にして草青みたり（漢詩「草木深し」をアレンジ）」を引用する。この時点で学習者は、平泉の描写と漢詩『春望』とをつなげて、「自然の永遠性」対「人間の営みのはかなさ」という構図を考えることはできる。「芭蕉はここでなんとつぶやいたか。」という発問に対しては、「変わってしまった。」「無常だ。」という言葉を引き出すことはできた。しかし、まだ全員のものではない。また、「無常」という言葉の意味も、まだ表面的であるように感じられた。

ここで、既習教材、『万葉集』巻1-21「采女の 袖吹き返す 明日香風 都を遠み いたづらに吹く（志貴皇子）」を投入する。この歌は本校にとっては大事な歌である。本校ではこの歌を2年生後期から学び始める。3年修学旅行においては甘樫丘にて大和三山を見ながら、この歌にメロディをつけたものを全員合唱するという、長い伝統がある。今回の学習者も、明日香風に吹かれながら、志貴皇子の無常観を修学旅行で追体験してきた。つまり、全員に共通体験があったのである。ゆえに、この授業においてこの歌を掲示した段階で、学習者の中から「ハッ」と息をのむ音が聞こえた。この瞬間、芭蕉の描いた「過去の、人工的な人間の営み」対「現在の、自然のみの世界」という、

落差の対比が学習者のものになり、「無常観」の意味や感情が思い描けるに至ったのである。

③繰り返し、表現の手法を意識させる。

ここでは「対比」である。2つのものを対比させることによって、AもBも、それぞれがきわだつことになる。この教材のみならず、これまでも既習教材には対比の表現が効果的に使われていた。それをここでも意識することによって、「過去」対「現在」、「人間」対「自然」、「繁栄」対「無」といった対比が重なり合うことによって得られる複雑な思い、無常観、思考の深まりなどを実感することができた。

単元全体を通して上記のような読み方を進めていった。

3. 3. 7 分析と考察

まず、学習者の共通体験（既習教材を含む）を本教材の読解の補助教材として使うことにより、学習者が個々に読解を深めることができた。一見、全く関係ないように見える他教材をつなげて比べ読みさせることにより、さらに深く読み味わうことができたと考える。（例「平泉（前半）」の読解に、「采女の歌」を重ねて読ませること。）彼らは、複数教材をつないで考えることで得られるものの大きさに気づき、楽しんでいた。

また「対比」の手法に注意を向けながら読んでいく姿勢を持たせたことにより、学習者はただの古典的文章としてはとらえず、設置された言葉に何かの「意味」を導こうとして意欲的に読むことができた。

さらに、学習者には多少難しい課題を与えることにより、個々に考えることの楽しさを知るとともに、仲間と話し合って学び取ることの意味も再認識することができた。

最後に、常時使用している「さりはか一ど」の存在により、全員の思考を常に公開。意見交流を促進することができた。これらは成果と言えよう。

一方で、古文の読解に不安を残す学習者にとっては、さらにスモール・ステップの読みが必要であった。しかし、個人差はあれども、難しい課題だからといってあきらめることなく、一人ひとりが考えようとする姿勢があった。「深い学び」を仕組むにあたり、今回、「平泉（前半）」の読解に、「采女の歌」を重ねて読ませることで、ある程度の成果があったとは言えるが、「采女の歌」を使わない別の方法はないのか、あるいは「采女の歌」以外の教材を使用するとどんな学びになるのか、についてはさらなる考察が必要である。これからも研究を深めていきたい。

※本実践の詳細については、193ページから始まる拙稿をご参照いただきたい。（松原洋子）

3. 4 単元名 自然と向き合う～和歌をはじめとする古典文学の表現を中心に～

3. 4. 1 単元の目標

- ①新たに出会う様々な古典文学の表現や学習に、意欲的に向き合おうとすることができる。
- ②内容理解を正しく進めていくとともに、自然との向き合い方、自然観の変遷等の学習を通して、今後の自分自身の命や人生との向き合い方、命の在り方の模索、さらに自分の価値観の形成と広汎化・深化のための基礎（「生きる力」を育む土台）を得ることができる。
- ③学び合いを通して、他の多様な意見と触れ合い、表現や語句等の新たな学びや気づきを活かし、さらに理解を深め、それぞれの表現に「言葉の力」を見出すことができる。
- ④古典学習に必要な知識（歴史的仮名遣い・語句の意味、時代背景等）を理解することができる。

3. 4. 2 単元設定の理由（省略）

3. 4. 3 単元の学習指導計画（計12時間）

第1次 「月に思う」他（1時間）

第1時 古典文学を学ぶにあたっての確認（歴史的仮名遣い・語句の意味等）

「月に思う」を読む・「雪月花」という概念に触れ、月の見方・表現の変遷に触れる

第2次 「雪月花」とは（5時間）

第1時～第3時 白居易作「寄殷協律」を読む

第4時～第5時

在原業平「世の中に 絶えて桜の なかりせば 春の心は のどけからまし」
小野小町「花の色は 移りにけりな いたづらに 我が身世にふる ながめせしまに」
二首における「花」の詠まれ方の違いに触れる
なぜ今日まで「雪月花」という概念が受け継がれてきたかを考える

第3次 自然との向き合い方の変化（5時間）

第1時～第4時 兼好法師『徒然草』第一三七段、一九段を読む

兼好法師の自然との向き合い方、自然観に触れる

第5時 兼好法師や藤原顕輔の和歌等をふまえなぜ自然との向き合い方・自然観・美意識が多様化していったのかを考える

第4次 単元の総括（1時間）

第1時 単元の総括として、自己の考えをまとめる

3. 4. 4 単元学習の実際

まず導入として、歴史的仮名遣いや単語の意味の変化といった、古典文学の表現を読み進めるために必要な知識の再確認を行った。そして第1次において、「月に思う」を教材に学習を始めた。自然と向き合う単元学習の導入部分であり、すでに学習している「いろは歌」やそこで得た「無常観」という感覚をふまえ、人と自然とのかかわりや「雪月花」という自然に対する価値観に触れながら、物語や和歌・随筆等を「月」を中心に順を追って学び、なぜそれぞれの表現に関して、「月」に対する思いや姿勢が、時代や人によって違いが出たのかを考え、「どんな姿であれ、月は美しいから。」「その人個人の自然観・美意識が形作られたから。」という意見が出された。後の授業展開の核になる意見の共有に繋がったと考えられる。

第2次第1時～第3時では、「月に思う」で取り上げられた「雪月花」という言葉について、その初出の表現（白居易作「寄殷協律」）に触れた。「雪月花」が単に冬の「雪」、秋の「月」、春の「花」を指すだけでなく、「雪・月・花といった四季折々の美しい時」を指すという解釈も合わせて提示し、「雪月花」という言葉の解釈や意義を考えた。

この授業では、「雪月花」の初出の表現に触れるため、白居易作の漢詩を用いた。したがって、読みを確認し、また今後の漢文（漢詩）学習の基礎とすべく、漢文訓読の基本（白文・訓読文・書き下し文の違い・訓点等、再読文字・返読文字、漢詩の基本等の知識）も合わせて学習した。中学校における漢文学習のスタートでもあるため、時間数を増やして取り組んだ。レ点や一二点のみで構成されているため、訓点の学習については非常に効果的な教材であったと考えられる。

第2次第4時～第5時では、在原業平・小野小町の「花」を詠んだ和歌を学習した。第1次第1時で学習した月の描写、月に対する価値観・見方の変遷や多様化をふまえ、次時扱う予定の兼好法師『徒然草』「花は盛りに、月は隈なきをのみ見るものかは。…」との関連から、「月」と「花」に関して、二首における「花」の詠まれ方の違いに触れた。満開の桜を想起させる在原業平の和歌、盛りを越えた桜を自分の人生と重ね合わせた小野小町の和歌を学び、次時以降の「徒然草」の学習に繋がる描写・価値観・見方の変遷や違いを実感した。

そして、月の描写・月に対する価値観・見方の変遷・多様化と、この「花」の歌二首の違いを比較した上で、なぜ今日まで「雪月花」という自然に対する概念が受け継がれてきたかを、まず個人で考えた。次に、4人班の形態にし、班でそれぞれの意見を材料にして、学び合い・話し合い活動を行った。そして、最終的に学級全体で共有し、それぞれの意見を価値付け、全体に還元する場とした。ここでは、様々な自然に対する価値観（自然観）の成立や変遷がなぜ成されてきたかということ、既習事項である「無常観」等と関連付けさせて考えさせるため、これまでの「いろは歌」等での既習事項を活かす・意識することを強調して学習を進めた。

第3次第1時～第4時では、『徒然草』（第一三七段、一九段）を学習した。これまでの学習をふまえ、

特に「花は盛りに、月は隈なきをのみ見るものかは。」と表現した兼好法師の自然との向き合い方、自然観に、深く触れていった。特に、美しさに満ち足りた、非の打ち所のない完全美としての自然のみを向き合いや評価の対象とするのではなく、兼好法師自身の自然観が様々な「変化」に目を向けて、不完全あるいは盛りを越えたものにも価値を見出すものであったことを理解し、次時の「なぜ自然観が多様化していったのか」を考える土台とした。

第3次第5時では、「日本における自然観・自然との向き合い方（や美意識）がなぜ多様化していったのか」について、個人で考え、班で共有し、意見をまとめ、全体に還元した。特にこの過程では、「自然を自分の人生に当てはめて考える」というような、「生きる力」に繋がる意見を共有することができた。

第4次第1時では、改めてこの単元を貫くキーワードとして「無常観」や「変化」、「雪月花」、「自然との向き合い」、「多様化」、「言葉の力」、「生きる力」等が挙げられることを再確認し、「自然を自分の人生におきかえ、自分の人生（生き方）を見つめる」→「自分の人生・生き方を考える、見出す」こと、さらには「これまでどう生きてきたか、今をどう生きているか、これからどう生きていくか」を考えていくことが「生きる力」を裏付けていく、という総括をし、授業を終えた。

3. 4. 5 分析と考察

「自然と向き合う」という視点、またそれを通して「言葉の力」を見出し、かつ「生きる力」を育んでいこうとする学習の中で、言葉や表現に詠まれ残された自然、あるいは学習をふまえた生徒の記述や発言の中に「言葉の力」を見出し、自らの「生きる力（生き方、人生、生き様）」といった視点を、個々の生徒が、自分なりの形で、中学3年までの数年間を通じて形成していこうとする土台を作ることができたと考えられる。また、他との学び合いの中で、国語科の定義付けた「深い学び」の実践に繋がった。これらは、次年度以降の継続的な単元実施に資する大きな成果であると考えられる。

一方で、本格的な古典学習に向き合い始めたばかりの1年生の学習において、基礎力を養おうとする反面、難解な内容や文法事項も含む多数の資料・教材も使用したという点について、そのバランスが生徒の学力や理解に対してどのような影響を与えたか、あるいは与えたとするならばどのような配慮が必要であったか、今後どのような配慮が求められるか、それぞれの教材と生徒の記述等を検討し、必要に応じて修正していかなければならない。「自然との向き合い」を実践しつつ、生徒の教材に対する意欲を持続させ、学習の質を高めながら、さらに「深い学び」を実践していくかについては、さらなる考察と実践、評価の反復が必要となる。

※詳細は169ページからの論文を参照されたい。

(菅 俊輔)

3. 5 単元名 自然を読み、当時の生き方を考える

3. 5. 1 単元の目標

- ① 古典文学の表現に注目して、当時の生き方を読みとることができる。
- ② 「学び合い」の価値を実感し、「言葉の力」による解釈の広がり気づくことができる。
- ③ 〈係り結びの法則〉を理解し、その効果を感じることができる。
- ④ 描かれた〈生死〉を読みとり、現代の〈生〉について考える。

3. 5. 2 単元設定の理由（省略）

3. 5. 3 単元の学習指導計画（全8時間）

第1次 「音読を楽しもう 平家物語」（『国語Ⅱ』光村図書）を読む（2時間）

第1時 「平家物語」を音読し、現代語訳を確認する

気づいたこと（疑問点等も含む）をノートにまとめる

第2時 前時に気づいたことを全体で共有する

「祇園精舎～理をあらはす」と「おごれる人～塵に同じ」を比べる

「沙羅双樹」を読み解く

第2次 「扇の的——「平家物語」から」（『国語Ⅱ』光村図書）を読む（3時間）

第1時 「扇の的」の範読を聞いた後、「扇の的」を音読する
係り結びの法則を知り、本文の該当箇所を見つける

第2時 自然の描写の意味を考える
自分なりに朗読を作り、練習を重ねる
互いにペアを作って朗読しあって、それぞれの解釈を交流する

第3時 「弓流し」を読む
武士としての生き方を考える

第3次 「形」(『新しい国語3』東京書籍)を読む(3時間)

第1時 「形」を読み、二項対立に気づく
(形/実質)の二項対立を、本文の記述に基づいて具体化する

第2時 中村新兵衛の「後悔」が何に対するものであったかを読みとる
(形/実質)のどちらが重要であるか考え、意見を交流する
「脱構築」という概念に触れる

第3時 単元を振り返りながら、当時の〈生〉自分の〈生〉について考える

3. 5. 4 単元学習の実際

本実践では、「平家物語」導入であり、また「平家物語」の根幹となる理念を形づくるものであり、さらに〈自然〉という視点から物語と向き合うひとつのきっかけとなる「沙羅双樹」に特に注目した。「沙羅双樹の花の色」とは指導書によると、「釈迦入滅の際、四方にあった四双八本の沙羅の木の花が、釈迦の臨終と同時に白変した(枯れた、あるいは開花した、と伝える説話もある)という故事を指す」と説明されていて、「いずれも人の滅びの象徴で、それを踏まえて、「諸行無常」「盛者必衰」という二つの仏教理念を提示する」ものとされている。「平家物語」が作られた当時の人々にとっては「実感として捉えやすい身近なものであった」が、現代を生きる我々にとってはあまり馴染みがないものであるため、日本における「沙羅双樹」と言われているナツツバキを紹介した。ナツツバキの花はわずか1日で落ちてしまうことや、ツバキの花は〈枯れる〉という表現でなく〈落ちる〉と表現されていることに注目することで、儚さや平家の行く末の暗示を感じることができた。また、ひとつの句に多くの意味が込められていることに気づいたことで、一つひとつの言葉を丁寧に読み解いていこうとする姿勢が作られた。

「扇の的」では、朗読を中心に扱い、その場面に漂っていたであろう緊迫感を大切にした。この場面づくりに大きく影響している「風」や「波」を軽視せず、ここで自然の描写がされている意味を感じながら、「那須与一」が置かれた状況を感じ取ることができた。冒頭の部分で、一つひとつの描写を大切にしようとする姿勢が醸成されていたため、積極的に本文を解釈していこうとする姿が多く見られた。係り結びや対句を意識しながらその場面を表現する朗読をそれぞれが考え、その朗読を相互評価する過程で、様々な解釈と出会い、その違いを楽しむことができた。

「弓流し」は短いながらも当時の武士のあり方を考え、〈武士の誇り〉を守る行為を読みとることができたが、現代の価値観で考えた場合、疑問をもった生徒が多かった。その疑問は続く「形」に持ち越され、引き続き考えていくことになる。

「形」では、〈形/実質〉の二項対立に気づく生徒が多く見られたが、自らに引きつけて考える生徒はあまり見られず、第三項の選択という方向での〈脱構築〉は見られなかった。教室全体で二項対立について議論していき、次第に「形」を重視する生徒と「実質」を重視する生徒による討論が始まっていった。教室全体で議論することにより、立場の入れ替わりも容易で、本文の記述に立ち戻りながら自分の立場を明らかにしていた。

3. 5. 5 分析と考察

先人たちが残してきた言葉を丁寧に読み解くことで、その言葉や表現に込められた「言葉の力」を感じられたことが大きな成果として挙げられる。その過程で、生徒同士の交流が設定されることで、個に

閉じた学びになることなく、〈学び合い〉の大切さを実感することができた。一方で、自らに引きつける部分がやや弱く、より自分の生活や人生に繋げて考えさせる場面を作っていく必要がある。

現在、第2学年では、来年度の修学旅行に向けて『万葉集』を扱っている。和歌を読み解き、当時の明日香を生きた人々に思いを馳せることは容易ではないが、現地に赴き、それぞれが明日香で読まれた歌の解釈を深めていけるように、単元を設定している。特に「万葉植物」をはじめとする歌に詠み込まれた〈自然〉を切り口に、当時の人々の思いを想像しながら解釈することを重視していて、自然の中に生きる自分を強く意識する契機にしていきたい。現地に立って、自然との結びつきを実感してほしい。

また、「自然と向き合う」という視点は、現代文でも共通している。「モアイは語る——地球の未来」（『国語Ⅱ』光村図書）において〈自然との共生〉を考え、「生きる力」に迫る1つの契機となった。イースター島の歴史から〈自然／文明〉の二項対立の愚かさに中学二年生が簡単に気づけるような構成がなされているが、〈自然が大切である〉や〈自然を守らなければならない〉といったこれまでも使い古されたようなスローガンにたどり着く生徒が非常に多かった。これから考えていかなければならないのは、〈自然／文明〉という二項対立の構図の中でどちらが優先されるべきかではなく、この二項対立をどのように乗り越えていくことができるのかである。この他にも「ディズニーランドという聖地」（『中学校 国語3』学校図書）でも〈自然／文明〉という二項対立は扱っている。

第2学年では、国語科の教科固有の学びとして「言葉の学び」を大切にすることを前提に、「自然」と向き合う中で、読みとったことを改めて自らに引きつけ価値づけし、「生きる力」を育むことを目標として学習に取り組んできた。今後、「深い学び」を大切にすることで、教科固有の学びを大切にすることはもちろん、他教科との関わりも考えながら、〈自然〉と向き合い、「生きる力を育む」授業の実践を設計していきたい。

（川嶋 正志）

4. 教科全体の成果と課題

4. 1 成果

- ① 様々な教材文や生徒同士の表現の中に、「言葉の力」を見出し、互いに肯定的・共感的に実感し合い、味わい、かつ自らの表現に繋げることができた。
- ② 多くの先人たちが残してきた様々な言葉・表現を、様々な教材文の中で実感し合い、多くの表現から見出せる「言葉の力」「生きる力」に触れることで、学びの深まりを実践できた。
- ③ 「生きる力」については、学年ごとの発達段階にもよるが、教材文での学びや気づきを、自分の生活や人生に繋げて考えていくという、自らがどう生きていくかという視点に繋げ、「生きる力」を醸成していく姿勢に結びつけられた。
- ④ 各学年での実践において、テーマに応じた単元・教材を開発するために様々な資料を用意し、実際の授業実践に活かした。また、教材を用いる時機を考慮し、班形態等での肯定的・共感的な話し合い・学び合い等を通して単元学習に取り組み、「深い学び」を実践することができた。

4. 2 課題

- ① 「自然と向き合う」「言葉の力」「生きる力を形成していくこと」、学年での発達段階に応じて、また各教材・テーマに対しての積極さや教材の内容の違いによって、現代における使用法とは異なったり現代では用いられなかったりする語句の理解なども含めて、やはり現代語訳といった表面的な内容解釈で終始して完結する生徒と、昨年来の継続を意識し、あるいは比較し、その表現の様々な背景にまで理解を深めていく生徒等というように、個人差が生まれた。
- ② 学び合い・話し合いの方法や形態（班やペア）、各生徒に求める役割の検討、学び合いの単元における実践頻度については、学年ごとの現状をふまえ、さらに検討を重ね、充実化させていかなければならない。
- ③ 「深い学び」については、国語科の定義したものの検討と修正を重ね、さらなる実践に繋げていく必要がある。